役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

本を読まなくなった時代に思うこと

常任理事　白崎（しらさき）　修一（しゅういち）

最近の若者は本を読まなくなった――そんな言葉を耳にする機会が増えました。確かに、書店に行っても若年層の姿は少なく、代わりに誰もがスマートフォンを手にしてSNSに目を向けています。私が子供だった頃は、メルヘンやホラー、人生論など、さまざまなジャンルの本を手に取り、自分の知らない世界に触れることが日常でした。本を読むことで他者の人生を追体験し、自分と異なる価値観を知り、心の地平を広げることができたように思います。

一方、現代の若者たちはSNSを通じて日々膨大な情報にさらされています。その多くは断片的で、真偽の定かでないものも少なくありません。しかもアルゴリズムの働きによって、自分の興味の範囲と似た価値観ばかりが表示される仕組みになっており、結果として情報の多様性が損なわれているように思えます。目の前にあふれる無数の「意見らしきもの」に流され、物事を深く考える力が養われにくい環境ではないでしょうか。

もちろん、全ての若者が思考を放棄しているわけではないでしょう。むしろ、YouTubeで歴史や哲学の解説動画を見たり、ポッドキャストで社会問題について語り合ったりと、新たな方法で知識を得ようとする姿も見えてきます。媒体が変わっただけで、知的好奇心そのものが失われたとは言えないのかもしれません。

それでも、私はやはり「本を読む」ことの力を信じています。読書とは、言葉をじっくり味わい、文脈を追い、自分の思考を深める営みとして非常に大切な行動です。そこには即効性はありませんが、確かな重みと静けさがあると信じています。だからこそ、情報の速さよりも、考える力の深さを大切にする文化を次の世代に渡すために、私たち大人が後世に本の魅力や、読むことの楽しさを語り継いでいく必要があるのではないでしょうか。

街の鼓動を見守る小樽天狗山

監事　阿久津（あくつ）光之（みつゆき）

かつて小樽は「北海道の『心臓』」と称され、物流拠点として本道の発展に大きな役割を果たしてきました。石造倉庫群や運河に象徴される港町としての景観は、その豊かな文化と歴史の証でもあり、本年２月には「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民の力」で創られ蘇った北の商都」が、初の小樽市単独の日本文化遺産として認定されるに至りました。

その小樽の街を象徴する標高532メートルの天狗山は、私にとって幼少期にスキーで遊んだ裏山のような存在であり、特別な思い出が残っています。

天狗山から望む風景は日中も夜も格別で、「蟹工船」の著者・小林多喜二が「街並みが山腹に階段形に這い上がった港町」と表現したように、碧い海を背景に美しく展開されます。夜には、漆黒の海に浮かぶように輝く街の灯りが幻想的であり、北海道三大夜景の一つとして数えられるほか、ドラマや映画のロケ地として国内外から多くの観光客を魅了しています。

天狗山がその姿を保ちながらも、時代とともに求められる役割に柔軟に応じ続けているように思えるその姿は、まさに地域に寄り添いながら変化を遂げてきた象徴的存在です。

さて、私が所属する小樽市医師会もまた、今年一つの大きな節目を迎えました。1972年に建設された６階建ての医師会館は、半世紀にわたり地域医療の拠点として親しまれてきましたが、今年５月にその旧医師会館を離れ、保健所・総合福祉センターとともに複合商業施設「ウイングベイ小樽」内へと移転いたしました。

この移転は単なる施設の更新を超え、小樽市が直面する人口減少や少子高齢化といった社会構造の変化に対応するものであり、地域医師会にとっては「選択と集中」という観点から重要な決断であったと、私は感じています。

天狗山がその姿を変えながら地域に寄り添い続けているように、時代にふさわしい地域医師会の在り方をさらに模索しながら次世代へつなげていくことが大切であると考えております。